
夢

中村熊助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢

【Zマーク】

Z7629A

【作者名】

中村熊助

【あらすじ】

普通の女子高校生”相沢優貴”。彼女はクラスの雑用係に任命され、同じ係りの斎条君と居残りをする羽目に…。そんな優貴は彼氏と別れて三日の乙女。別れたショックで落ち込む優貴に告白をする斎条だが…。ラブコメです。

第五話（前書き）

翠と話を続けていた私の前にあらわれた人物…それは…！？

「あらら、何してゐるの？お一人さん。」

どうも氣まずい雰囲氣になつていて、一人に向かつて向こうからかけてくるみなれた人物。

「げつ、斎条君…。」

噂をすれば、といつといふだ。

（神出鬼没…）（汗。）

すると翠が田線をそらしてから、田を閉じてもう一度私を見る。

そしてにっこりと笑つた。

「じゃ、頑張るのよ、優貴…！」

そう言つて、先ほど斎条君が現れた屋上に向かつてダッシュで走りだした。

「え、ちょ、一人にしないで…！」

必死で追いかけようとするが、何せ翠は足がむちゅくちゅ速い。

しだいにかんかんと階段をける音が遠くなつていぐ。

で、一人きりになつてしまつた私…。

なんかにこーと満面の笑みの斎条君が視界に見える。

「一人きりにしてくれるなんて友達優しいね?」

「むしろ迷惑よ…」

が、斎条君はそんな私を翠と同じようにじっと見て、思ひがけない行動に出た。

強引に顔を両手でつかまれたかと思えば、田の前に斎条君の顔。

(おーおい、待て待て何この展開!?)

必死で押し返そうとするが、同時に抱きしめられる。

当然女のほうが不利で、かなうはずもない。

で、きづくと自分の唇に何かが当たっている。

(は…?)

はつとして思った。

これは…

キス

しかも私の場合、ファーストキスだ。

しばし、信じられない思いで止まつた。

「…すぐに酔いがさめたようになり、すさまじい勢いで斎条君を突き放した。

「だああああ…何すんの…」の変態イイ…」

「あは、『駄走さん。』

大激怒の私に対して、斎条はかなり『機嫌だ。

「返して…私のファーストキス…！」

「無理です。」

斎条君は必死に言つ私を見て、急に顔色を変えた。

「おお、やつとわかつてくれたのか…！」と思いつつ、
せめて謝らないと今後は口も聞かないと決めた。

「お前、そんなに俺が嫌いか？」

「は？」

斎条君の口は本気だつた。

目線が痛いくらい鋭い。

視線を合わせていられなくなつてうつむいたら水のしづくが床に落

ちた。

(あれ……?)

私は泣いていたのだ。

「……俺がそんなに嫌いか?」

もつ一度、さつきよりゆつくじめに斎条君が叫ぶよつこ
しかし声を押し殺すよつこに言つた。

「……嫌いよ。」

つぶやくよつこに小ちく言つた。

そしてもう一度息を大きく吸い込んで、叫んだ。

「あ、あなたなんか、大きつらいよ……!」

そして私は彼を置いて一人屋上を出た。

瞳から涙があふれ出て止まらない。

でもその意味がわからない。

優貴が去つていいく足音を聞きながら、斎条はつぶやいた。

「あ～あ、俺つて本当馬鹿だ。」

「はあ…」

ひとまず逃げるよつに屋上を飛び出してきたのはいいが、荷物を屋上に置き忘れたままだった。

翠もいな
い。

ああ、一人でどうしろというのか。

い。
一人でしどろもどろしてあれこれ考えてみるもの、有効な策はな

(あああああーーーーーもうーーー)

おしゃべりして、考えを甘噛んだ。

斎条君はどうしてゐるのかなあ……。

ふと思つたが、すぐに脳内消去！！

構うものか……！！

ひとまず落ち着けうつと思つて、歌を歌つた。

”

歌い終わると、背後から拍手。

はつとして振り返ると斎条君がいた。

「どうやら荷物を持ってきてくれたようだ。

「一緒に帰ろう」

小さくうなずいて、一緒に帰ることにした。

帰り道、私はなんだか気まずくなつて黙つたが、斎条君はいつもと変わりがなく話をしてくれて、なぜかとてもほつとした。

「あのや、やつ もは」めんな。

「は？」

視線を合わせずに顔を真つ赤にしている斎条君がいた。

思わず私も顔が真つ赤になる。

「すまん！俺、今まで付き合いつかしたことなくてさー。友達に言つたら”ひとまずキスしどけ！”って言われて～

「…」

なんつー理由だ。

馬鹿か…？」の男…！

あきれて、その「うちおかしくなつて私は笑つた。

「斎条君つて馬鹿…！」

すると斎条君はふつと笑顔になつた。

今まで見たことない「くらこす」く綺麗なやさしい笑顔だつた。

それを見てなんか私はビキビキしてしまつた。

（あれ…？まで、今の笑顔はまたしてもテクなのか…！？）

とか思つたけど、そんなことを楽しく思つてる自分が確かにいて、だから少しくらい氣を許してしまつた。

そしてその隙に…

斎条君は私の手を握つて必死な顔で訴えた。

「もう一度チャンスをくれ！お願い…！」

正直びっくりしたけれど、私はため息をつこうとしたつむづいた。

すると土下座しながら斎条君は「」つ続けた。

「お友達からはじめてくだわ…！」

「……。」

(何これ……?)

かくして私の波乱の日々は本戦を迎える。

— 今度は何するんだ！？ -

まったく予想のつかない男である。

まあ、ひとまずこの件で少し落ち着いたと思って、心配はしなかつた。

しかし、そんな私の判断は甘かった。

次の日、学校ではなんだか面倒なことになっていた。

第五話（後書き）

久しぶりの更新です。
お待たせした方すいません。
よければ感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7629a/>

夢

2010年10月21日22時20分発行